

心理臨床家の主体性と自由

—『ホモ・デウス』と『PSYCHO-PASS』から考える—

西嶋 雅樹

(人間科学研究科准教授)

はじめに

筆者の修士論文は、心理臨床家の迷いが心理臨床実践に於いてどのような意味をもつかという課題意識から成る調査研究論文であった。その後に世に問うことなく埋もれてしまっているが、迷うことは事例へのコミットメントの表れであるという趣旨で論じたことは今でも覚えている。自身が心理臨床面接に臨む際に（そして、特に困難な状況に置かれた際に）今でもその内容を時々思い出しする。

また、前々職の頃は、当時所属していた県の臨床心理士会で倫理担当理事も拝命した。会務のために自身が倫理研修を受けたり、あるいは会員向けの倫理研修を実施したりした。これらの経験の中で、職業倫理はただそれに従うための「べからず集」ではなく、私たちが心理臨床実践の中で倫理的葛藤を自覚し、その葛藤の中で意思決定をしていくための指針であることを学んだ。その関心は今も細々と続き、臨床心理学を学ぶ大学院生向けの教育の中で職業倫理に関するワークショップ形式の授業を採り入れてもいる（西嶋、印刷中）。

これが、今からおよそ15年から10年前から現在に至る話である。

この間に筆者は不惑の歳を迎え、世間的には心理職の国家資格が法制化された。筆者が大学や大学院で学んでいた頃と比べると、心理職を志す学生・大学院生の学びの環境も随分と充実してきたという思いがある。そして、教員となった筆者としては、充実が心がかけると共に「過保護」になりすぎぬようにせねばという思いもある。

一方で、COVID-19の影響や想像以上の進展を遂げているテクノロジーの進化など、私たちを取り巻く社会情勢の変化も実に急激なものとなっている。そもそも私たちの「こころ」を以前ほどのトラッドな意味で捉えてよいのかについても（先人達が絶え

ずそうしてきたように）検討が必要であろう。

こうした諸々の状況の変化の渦中に於いて、本稿では今改めて、心理臨床家にとっての「主体性」について考えてみたい。そして「主体性」と共に「自由」についても考えてみたい。

そもそもの筆者自身が日常においては主体性をあまり発揮せぬ人間である。故に大学院生教育に関する論考という体もととりつつ、自省の思いで本稿を綴る。

VUCA の時代と、日常のオンライン化

現代という時代を表現する言葉として VUCA という言葉がある。これは Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の各頭文字を取った言葉である。この言葉の出所は1990年代の軍事用語とのことであり、今日ではビジネスやリーダーシップ、あるいは教育論の文脈でよく目にする言葉という印象にある。

一寸先がどうなるかわからないという意味では、ごく近い出来事としては、2019年12月に始まったCOVID-19のパンデミックや2022年2月以降のロシアによるウクライナ侵攻が挙げられる。私たちの生活は変わらぬ今日の繰り返しの先にあるのではなく、突如として非連続的に様相を変えうる。この生活の非連続性は阪神淡路大震災や東日本大震災などの自然災害でも繰り返し痛感するところである。また、クライアントとの対話を省みるに、あるいは筆者自身の人生の歩みを省みるに、非連続的な変化は個人レベルでも往々にして起こりうる。

その筆者は、スクールカウンセラーとして小中学校に出入りをする立場にもある。教育現場では元々ICT教育の振興に向けて取り組みが進められていたが（GIGA スクール構想など）、今やコロナ禍に於ける様々な営みのオンライン化により、学校でも

児童生徒の1人1台タブレットの時代を迎えている。皮肉なことに、教育行政がICT教育の振興を謳って汗水を流すよりも、世界的な感染症拡大の方がICT教育の推進には強力な追い風となった。それだけではない。スマートフォン所持の低年齢化やYouTube育児など、デジタルデバイスに触れる機会の低年齢化と危惧の声の例は枚挙に暇がない。

このような社会情勢の変化の中で、心理臨床に携わる身として切実に感じることもある。それは、意思決定プロセスに我々を取り巻く社会の変化がどう影響するかという疑問である。また、影響するとしてその影響がどう表れてくるかに対する懸念と関心である。

『ホモ・デウス』

ところで、読みたかったが置き場が無くて購入を見合わせている書籍というものは、各自に思い当たるものがあると思う。筆者にとってのそれは、Harari, Y. N. による『ホモ・デウス』(Harari, Y. N., 2015/2022)であった。2018年刊行の単行本はかさばるために購入を長く見合わせていたのだが、幸い2022年秋に文庫版が出た。文庫版を購入して読み始め、3ヶ月ほど苦勞して、ようやく読了することができた。

既に読まれた人も多いと思うが敢えて紹介すると、この『ホモ・デウス』の中では、人類史の中で宗教や科学、民主主義や資本主義などがいかなる機能を果たしてきたかのレビューが行われている。加えて、現代の生物学とコンピューター科学の知見では、私たち人間は固有の自由意志を持つのではなく、アルゴリズムとして場に即した反応をしているに過ぎないとされている、ということも強調して述べられている。

アルゴリズムが機能するためにはデータが重要である。そしてデータからしてみれば、アルゴリズムの担い手はなにも人間のような有機生命体である必要はない。これはいかなることかということ、アルゴリズムの担い手は、意思を持たずに演算をする無機的存在であってもよいと述べられている。このように筆者は理解した。この無機的存在とはすなわち、今日よく目にする言葉としてはAIを意味する。さらに、AIが自己増殖していく中で人間は今の地位

を追われ、やがてはAIに隷属するのではないか。そんな趣旨のことが『ホモ・デウス』には記されている。

そして、著者であるHarari自身は、そういう世が到来しないように我々がどのように選択を続けられるかということを、本書の最初と最後で強調している(そしてそれが歴史を学ぶ意義であるとしている)。

『PSYCHO-PASS』

アルゴリズムをめぐるHarariの論とはやや異なるかもしれないが、筆者にとって重要なアニメーション作品がある。その作品の紹介もしたい。

全能に近いシステムが人間の職業選択や治安維持を司る世界。そんな世界を描いたSFアニメーション作品に『PSYCHO-PASS』という作品がある。『PSYCHO-PASS』は初出が2012年10月であり、この原稿を書いているこの年度が、丁度10周年の節目という作品である。『PSYCHO-PASS』は10年前の作品でありつつ今なおシリーズ展開がされている、根強い支持を集めている作品である。

この『PSYCHO-PASS』では、上述したように、人間の職業選択や治安維持は個々人の意思ではなくシビュラシステムという包括的生涯福祉支援システムが司っている。このシビュラシステムによる統治の仕組みは、次のようなものである。

街頭など様々なところに設置されたスキャナにより、市民はサイマティックスキャンと呼ばれる仕組みで生体情報の読み取りを行われる。サイマティックスキャンにより市民の精神状態が読み取られると、その結果はサイコパスや犯罪係数と呼ばれる数値や、色相と呼ばれる視覚化されたバロメーターによって表される(もちろんここでのサイコパスは精神医学や臨床心理学が用いる意味でのそれとは異なる言葉である)。

ちなみにシビュラというのは、古代ギリシアにおける神託の巫女を指す言葉である。人々はシビュラシステムによる神託のごとき提案に、職業選択などの人生上の重要な選択を委ねている。

この作品の社会において公安局に身を置く主人公の常守茜は、仲間(厳密には監視官と執行官に分かれる名目上の主従関係にある)と共に犯罪係数に

よって割り出される犯罪者を追う。そして、犯罪者に向けてドミネーターと呼ばれる銃の引き金を引く。このドミネーターもシビュラシステムによって制御されていて、引き金が引けるか否か、引いたときにどのような効果を発揮するか（犯罪者を麻痺させるパラライザーか、抹殺するエリミネーターかが同じドミネーターの中で切り替わる）もシステム任せである。

こうした社会の在り方に疑義を呈するべく、シビュラシステムによる犯罪係数の計測を逃れうる犯罪体質者の槇島という人物が、幾多の猟奇的な事件の黒幕として暗躍する。その槇島を捕らえるために、シビュラシステムの秩序から自身も逸脱して公安局を飛び出し槇島を追う^{こうがみ}と、あくまでもシビュラシステムの秩序に従いつつも、システムの成り立ちを知ったことで葛藤する常守の2人が、それぞれの思惑で行動する。これが、『PSYCHO-PASS』の物語の中盤から終盤にかけての展開である。

筆者はこの作品が好きで何度か視聴をしている。何にそこまで惹きつけられるのか。岩宮（2013）は「自分のこころの奥にあるものとフィットするものを探したい」という思いから「読書に限らず、なぜか自分にとってとても惹かれるアニメや漫画のなかには、そういう（引用者註：フィットするものを探したいという）確認と発見の作業があるはずなんです」（p.28）と述べる。岩宮が述べるようなアプローチと思索を行う中で筆者なりに『PSYCHO-PASS』に対して感じることは、次のようなことである。

すなわちこの作品では、意思決定を自分の責任で引き受けずに他者に委ねることへの異議申し立てや疑念の提起が様々に示されている。そこに筆者は、10年前の作品でありながら、自身の生き方や今の時代の精神などと関連付けて、関心を寄せている。こうした自己理解をするわけである。

人間至上主義と『PSYCHO-PASS』

『ホモ・デウス』と『PSYCHO-PASS』を同時に引き合いに出したのは、本稿冒頭にふれた事柄とも関連している。いわば、私たちは（特に心理臨床家として）今日的な時代の潮流の中でどうやって意思決定をし、主体性を発揮することができるのか、と

いう問題意識である。あるいは、意思決定や主体性に人間の尊厳を見出そうとする筆者の関心自体が、もはや時代遅れの懐古的な関心に過ぎぬものなのではないかという問題意識である。

筆者は昨年に「異界」と「異世界」の異同について論じた（西嶋，2022）。ここで筆者は「異世界もの」と呼ばれる一連の作品の特徴を①定型性、②既知性、③可視化と序列化、の3点に見出した。JRPG的な剣と魔法のファンタジーの世界は主人公にとって（そして読者にとって）どこかで見たような世界であり、自他の能力やスキルはパラメータ表示されたりランク付けされたりして描写される。このような点に「異世界もの」の特徴があるというのが、この論の概要であった。

「異世界もの」と呼ばれる作品群が近年のライトノベルやアニメーションで人気を博しているからといって、それがそのまま私たちの時代精神の主流を表しているとはまで言うつもりはない。されど、本稿を記すに当たって定型、既知、可視など自らが用いたキーワードを久しぶりに眺めると、『PSYCHO-PASS』と関連して思うところも出てくる。

すなわち『PSYCHO-PASS』で描かれたような、自分の人生を大いなるシステムに委ねて予見可能な人生を歩むことをよしとする世界を、人生の選択に於いてビッグデータを活用することが隆盛を極める今日的状況（これが「異世界もの」の構造と重なってくる）とどうしてもつなげて考えたい筆者がいるわけである。

ウェアラブルなセンサー等によって自身のバイオメトリックデータを収集して自身を定量的に把握することをよしとする。こうしたイデオロギーが既に誕生していることが『ホモ・デウス』ではふれられている。Harariの言葉で言えば「数値を通しての自己認識」（下巻 p.219）である。また『ホモ・デウス』で繰り返し登場する言葉でいえば「データ教」の在り方にも通ずる。あるいは上記の筆者の用いた言葉で言えば「可視化」と繋がる。

そんなことはないと否定したい人の手首にウェアラブル端末が付けられているとすれば、意識では否定しつつも行動では肯定しているということであろう。

そして当然ながら、筆者はこのどちらが いいかの

答えを持つ者ではない。あくまでも、それは一人ひとりが選択する、各自の生き方の問題である。

『PSYCHO-PASS』が描き Harari が述べるような生化学的情報をシステムに預けてそのシステムからのフィードバックによって自己認識を進める世界は、絵空事ではなく、実現しつつある。

また、インターネット上に有益な情報があるという想定でまずブラウザ検索からスタートする学部生に、どう書物や学術誌を読んでもらうかということは、学部生のゼミ指導をしていても悩ましい事柄の1つである。

博報堂の伊藤耕太（2021）は、20代が娯楽等のために、世で言われているよりもブラウザ検索を活用しているということを、データを元に述べている。ここから浮き上がるのは、若者はネット上でよく言われるような Twitter や Instagram のハッシュタグ頼みの情報収集に留まらず、むしろキーワードを用いたブラウザ検索を行っているという実態であると伊藤は述べる。加えて伊藤が述べるのは、若者は意外と検索に頼ってものを調べているのではないかという推測である（そして筆者もこの記事を、ブラウザ検索によって見つけ、このように論を進めている）。

関心があることをより知り、深めるためには、今日ではブラウザ検索は強力な手法である。あるいは「手法」という幾つもある選択肢から選ばれた1つではなく、自明の行為として受けとめている人も多くいることであろう。しかし、この繰り返しは、ともすれば「必要なことは検索したらだいたいわかる」という信念を期せずして抱くことにもつながりかねない。それどころか、ChatGPT や Bing AI の登場によって、web 上での検索から AI への質問という形で「手法」の転換が生じつつもある。

今筆者が述べている在り方は、Harari のいうデータ教の考え方や『PSYCHO-PASS』のシミュラシステムの管理する世界と相性がいい。このことは、本論の読者にはお気づきのことであろう。この在り方に異を唱えたのが、『PSYCHO-PASS』であれば黒幕の槇島であり、主人公の常守である。

哲学者の伊藤晶子（2007）は、考えるということをめぐり次のような言葉を残している。「どうすれ

ばいいのかを考えることが考えることだ」（p.65）。「知らないからこそ、考えるのだ」（p.67）。

さらに伊藤（同）は、私たちの倫理的判断についても次のように述べている。「倫理すなわち善悪の問題は、本当に難しい。難しいのは、それが難しいゆえに何らか外在的なものに委ねてしまいたい、その誘惑に抗するのが難しいのである。（中略）しかし判断の放棄とは、自由の放棄である。人生の自由を失いたくないのなら、人は、自ら内なる善悪を問い続けるしかないのである」（pp.136-137）。すなわち、己が判断する、あるいは決断することに伴う困難や苦しさの中にこそ、私たちの自由があるのだ、と。

『PSYCHO-PASS』の中でも、主人公の常守が、その同僚で捜査の中で命を落とした^{かがり}藤と心象の中で対話するシーンがあり、次の会話が交わされる。

常守：うん、すごいよね。誰もが自分の人生を手探りで選んでた。でもそれが当たり前の世界があったなんてね。

藤：今じゃシミュラシステムがそいつの才能を読み取って、一番幸せになれる生き方を教えてくれるってのに。ほんとの人生？ 生まれてきた意味？ そんなもんで悩むやつがいるなんて、考えもしなかったよ。

常守：そうだね。重たくて、辛い悩みだよ。でもね、今では思うんだ。それを悩むことができるって、本当はとても幸せなことじゃないかって。

『PSYCHO-PASS』の作中のこの対話は、伊藤のいう「自由」と深くつながっている。

人間至上主義とデータ教

ここまでで筆者が長々と述べていることは、Harari のいうところの「人間至上主義」と「データ至上主義」の勢力争いに関わることである。

私たちの世界はやがて、Harari が予見するように、人間そのものは不要となって、データそれ自体が自己増殖していく世界になるのかもしれない。そしてその頃には心理臨床や心理療法と呼ばれる営みは、過去の遺物になっている可能性も大いにあり得

る。もしくは時代の流れに違和感を抱く一部のマニアックな人々（実践する側も訪れる側も）の間で、地下で嗜まれる営みになっているのかもしれない。

しかし少なくとも現状においては、個人の努力では如何ともしがたい大きな流れの中でも、考え、問い続けることが、人間の自由すなわち人間性を取り戻すことに繋がりそうである。ゆえに、と言い過ぎかもしれないが、クライアントはわざわざ心理臨床家のところを訪ね、心理臨床家も面接を通してクライアントと共に自らの主体の在り方を確かめ続けている。

再度博報堂の伊藤を引用する。伊藤（2021）はデータについてこう述べる。「元来、データは私たちに何か決められた答えを提示する存在ではありません。むしろ私たちの思い込みをひっくり返し、発想力を刺激し、新しい生活像を描き出す力になってくれるのです」。

データは従うものではなく、活用するものである。と要約するといささか陳腐な結論のようにも思うが、あくまでも人間側の主体性が問われているという点で、筆者は大いに同意する。しかし、意思決定や判断にはデータが必要である。この方向に傾倒しすぎると……、と論は堂々巡りの様相を呈してくる。

こうして論を進めながら思い出すことに、次のようなエピソードがある。

ここまで本稿を読み進められて想像されるように、筆者は『ホモ・デウス』を読んで、自らの在り方の根底や人間という存在に対する思いを揺さぶられる印象を抱いた。そして、人間至上主義の終焉に関する話を、ある知人に読書感想として伝えた。その人は「私たちがアルゴリズムに過ぎないなんてことはないだろう。現に我々はこんなふうを考え続けているんだから」と笑い飛ばしていた。それでいて、同じその人が別の日に筆者と交わしたお勧め書籍をめぐる雑談の中で「Amazon がお勧めで表示してくれる本って、つい買ってしまうんだよね」とさりとって、筆者は何とも言えない皮肉な、かつ、空恐ろしい気分を覚えたものである。

この知人も期せずして、ある面では本人の意に反して、Harari の呼ぶところの「データ教信者」なのである。そして、誤解を招くかもしれないので先

に自白をしておくと、筆者の中にもデータ教信者としての傾向は大いにある。筆者は己のライフログをデータとして蓄積することが好きであるし、多変量解析やテキストマイニングのように、人間の直感だけでは掬いきれないデータに対する探索的なアプローチには、大いに魅力を感じる。

大澤（2022）は、他ならぬ Amazon のリコメンド機能について、次のように述べている。「『他の本でもあり得たけれど、私はこの本を欲した』と思って入手するのと、『あなたの欲しいのはこの本ですよ』と AI から教えてもらって飛びつくのは、大違いなんです」（p.115）。その背景として大澤（同）は、直前で次のようにも述べている。長くなるが、中略しつつ引用する。「AI のご託宣に従っているときは、自分は何も失っていないような気がするわけです。（中略）でも、ここで奪われているのは、人間の『無意識』だと思うんです。心の内面の意識されている自由が失われているのではなく、無意識の次元にある自由が毀損され、奪われている。それは『偶有性』と言えるかもしれません。つまり、『他でもあり得た』ということ。（中略）『他でもあり得た』ことが留保されていることがすごく重要で、これがあるから人間って自由なんですよ」（p.114）。奇しくも大澤は伊藤晶子と同じく「自由」という言葉を使って、AI が我々に及ぼす影響について述べている。

自ら悩み、考え、選択する。そのたゆまぬ繰り返しの中に、私たちの「自由」の繰り返しの生成が根ざしている。これは前述の『PSYCHO-PASS』の常守と藤の対話に於ける「幸せ」にも通ずることである。悩みがないことが幸せなのではなく、悩めることが苦しくとも幸せなのである。そして、このことを如実に突きつけてくれるのは、筆者にとっては心理臨床面接の場に於けるクライアントとの対話場面である。

クライアントと場を共にするとき、心理臨床家である私は、こころの「自由」を相手にだけでなく、自らにももたらす場として、その場に在る。それぞれに悩みながら、迷いながら、クライアントと時と場を共にする。この繰り返しの営みの中で、立場を超えて両者が互いに、他ならぬ私が確かにここに在るという感覚（筆者はこの感覚を、自己存在感とで

も呼びたい)を心の中で確かめ合う。少なくとも、筆者にとっての心理臨床面接は、こうした時と場を意味しているように自省する。

おわりに ―研究をめぐる―

筆者自身が研究熱心ではないので偉そうなことはいえないが、大学院は研究者としての第一歩を踏み出すための機関である。しぶとく迷い続けるために、目の前の心理臨床事例の中から臨床の知を生成し続けるために、大学院生の皆さんには自らの研究テーマを見つけ、磨き、掘り下げ、人に伝える、という地道な研究活動を継続していただきたい。

本学を含む大学院の修士課程は、大学院設置基準の第3条第1項にあるように「広い視野に立つて精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする」機関である。専門職大学院に関する「高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とする」(専門職大学院設置基準第2条第2項)には直接には謳われていない「研究能力」を培うのが、大学院修士課程である。そのため大学院修士課程では、専門的な資格取得のための準備期間に留まるのみではなく、その後の生涯学習の素地になる研究能力を養うことが求められる。

ましてや、臨床心理士はその主たる4つの専門業務として、査定、面接、地域援助に並び、それらに関する調査・研究を担う専門家である。すなわち研究とは切っても切れぬ存在である。

河合(2006)は「何らかの意味で自分は研究している、ということが大事です」(p.12)と言葉を遺している。ここで河合がいう研究は「大学における研究もそうですが、『こういうことも、あったのではないか?』『こういうことは昔、誰がどうやっていたか?』とか、『どの先生はこう言っている』とか、他にもたくさんあります」という意味での研究である。そして、クライアントに関連する何かへの疑問を自ら抱き自ら探究しようとする姿勢を意味すると解される。

心理臨床実践に地道に従事するためには、面接の中で表現される事柄に疑問の種を見つけ、その種を研究に昇華させ、やがて己の心理臨床実践に還元し

ていく往還のプロセスが欠かせない。何かに従うのではなく、目の前の臨床的事実から問いを見つけ、その問いを皮切りに新たな智恵と道を生み出していく歩みが求められる。

橋本(2017)は職業倫理と関連して、「『わからない』を抱えられる心理臨床家が随分少なくなってきたようにも感じる」「『わからない』ことに直面するからこそ、心理臨床家はそこに自分の想像力をフルに働かせ、クライアントの些細な情報を見逃さず、手探りでもいいから適切に推し量りアプローチしようとする」(共にp.146)と記している。「わからない」を抱える姿勢は、近年再注目されている概念であるネガティブ・ケイパビリティとも通ずる。

外から答えがやってくるのではない。あくまでも、自らクライアントへの応えを地道に探究していく。この姿勢は、自らの人生への応えを自ら探していく、クライアントの取り組みと重なる姿勢でもある。

また、俳優の佐野(2023)は次のように記す。「正解がでないことに耐えられない人たちは、すぐに信じるか信じないか、こうあるべきだという原理主義的な話になってしまう。それはとても怖いことで、むしろ答えの出ないところに喜びがあると思うのですが。様々な物語が共存できなければ、どこで生きたらよいのでしょうか?」(p.153)。

本稿の冒頭では、今の時代の特徴がVUCAという言葉で表現されることを紹介した。しかし考えてみれば、私たちはそもそも心理臨床実践の中でVUCAの状況に身を起し続けてきた。なぜならば、心理臨床実践自体がクライアントの個別固有で一回性に満ちた営みで、そこでは心理臨床家側の柔軟かつ主体的な関与が問われるからである。

シビュラの神託に身を委ねるのではなく、己で考え続ける。『ホモ・デウス』に予見されるような人間至上主義の終焉が迫っているとしても、その終焉の時まで人間として、筆者は実践に携わり続けたい。

このセクションの冒頭では、研究と関連して「人に伝える」ということもふれた。オフィシャルな研究発表だけでなく、自分がおもしろいと感じたことを素朴に人に語る。筆者なりのこうした思いも「人に伝える」の5文字に込めた。本稿に関しても、は

はじめは筆者自身が考察の種を持っていたにせよ、その種は仲間と語らう中で芽吹き、育ち、今のこの形にひとまず辿りついた。あるいは、種自体を、かつて出会ったクライアント達との語らいの中から発見し、大事に携えて今日ここまでやってきた。仲間の存在に励まされて、今日もこうしてものを考えたり、原稿を書いたりしている。

仲間を見つけ、語らい、支え合う。これらのことは心理臨床実践の基盤をなすと共に「研究」の歩みの追い風となる。自身の主体性を育み続けるためにも、大学院生の皆さんには、仲間との交わりをぜひとも大切にしていきたいと願っている。他者との語らいによって生まれる自身の揺れが、次の一歩や一言につながって、こころの「自由」をその都度生成していく。筆者も負けじと、斯く在りたいと願う。

文献

- Harari, Y.N. (2015). *Homo Deus: A Brief History of Tomorrow*. Dvir publishing. 柴田裕之（訳）（2022）. ホモ・デウス（上・下 文庫版）. 河出文庫.
- 橋本和明（2017）. 倫理から読み解く問題解決のジレンマ. *臨床心理学*, 17(2), 145-148.
- 伊藤晶子（2007）. 人間自身 考えることに終わりなく. 新潮社.
- 伊藤耕太（2021）. 「検索離れ」は本当？ データから浮かび上がる若者の意外な検索行動 | 博報堂 WEB マガジン センタードット. <https://www.hakuhodo.co.jp/magazine/93455/> (2023/01/22取得)
- 岩宮恵子（2013）. 好きなものにはワケがある. ちくまプリマー新書.
- 河合隼雄（2006）. カウンセラーの自己研鑽. 河合隼雄・大塚義孝・成田善弘・藤原勝紀・氏原寛（著）. *心理臨床の眼差* 帝塚山大学大学院〈公開カウンセリング講座〉②. 新曜社, pp. 1-41.
- 西嶋雅樹（2022）. 「異界」と「異世界」. *精神療法*, 48(1), 35-39.
- 西嶋雅樹（印刷中）. 心理専門職の養成における職業倫理教育による職業倫理イメージの変化—架空事例を用いた授業実践の KH Coder による分析—. *ヒューマンサイエンス*, 26.
- 大澤真幸（2022）. 無意識が奪われている. 大澤真幸・川添愛・三宅陽一郎・山本貴光・吉川浩満（著）. 私たちは AI を信頼できるか. *文藝春秋*, pp. 99-129.
- 佐野史郎（2023）. 「自分の物語」を生きる——『悪魔くん』『河童の三平』. 別冊 NHK 100分 de 名著 「わが道」の達人 水木しげる. 釈徹宗・中条省平・ヤマザキマリ・佐野史郎（著）. NHK 出版, pp. 119-157.